

報



會

會 岳 山 本 日

112

月二十年六十和昭

集團登山に警告

塚 本 繁 松

近頃集團登山といふものが流行してゐる。以前は餘り使はれなかつた言葉で、元は多勢で山へ登る事を團體登山と言つて居つたのを近頃は集團と名が變つたやうである。いや集團登山と團體登山とは根本的にその理念に於て異なるといふ人があるかも知れない。たゞ漫然と大勢で登山するのは團體登山といひ、集團登山といふのは團體訓練を主目的とする登山であると解釋する人もあるであらう。いづれにしても團體登山には相違ないのだが、近頃は運輸の混雑から個人の旅行さへ制限されてゐる状態なんだから、團體旅行などんでもないと言はれるのが嫌さに集團登山と名を變へてカムフラージュしてゐる方が體裁がいゝのかも知れないが、運輸方面の事は別問題として、一體かうした團體登山の流行を時勢の然らしめる所として眺めてゐてよい事かどうか大いに考へねばならぬ事ではないかと思ふ。

我が國に於て、二千米級以上の高山に登るには、よく氣心を知り體力の揃つた者同志が、しつかりしたリーダーに引率されて尙其上

必要に應じて案内人なり人夫なりを同伴して登山するのを最も安全な方法とし原則とする事は古くからの定説であると思ふ。時代によつて人の思想は變つても、相手とする山は變らないのだからかうした原則は微動だもしない筈である。それなのに何故集團登山が流行して來たか、それも二十名や三十名の集團よりも五十名、百名甚だしいのは何百名もの大集團登山を行ひ、それは花々しく、そして時局向きであると考へる人さへ生じて來たのは何故であらうか。

修驗道の昔に歸れとも言はれる。それは中々よい所もあると思ふが修驗道には元々大集團登山なんてなかつた筈である。それこそたつた一人で無人の深山なり、高山なりで荒い修行を行つたのであつたこれは然し安全どころか、我が行ならんば生きて歸らずといふ決心の元に行はれたものであり、事實多量の行者が山中に白骨を曝した事であらう。元々登山はたゞ一人で行ふ所に意義深いものがあるやうに思ふ。しかしそれは甚だ危険が伴ふものであるから或程度以上の高山には容易に單獨登山はすゝめられないのである。それと同様に大集團登山にも恐るべき危険が伴ふものだから之も亦獎勵出來ない事だと思ふ。

大團體の悲慘なる遭難の例としては古くでは木曾駒に於ける小學生の遭難があり。最近では白馬岳に於ける青年學校の團體のそれがある。木曾駒では校長以下多数が倒れ、白馬では教諭一名が遂にその犠牲となつてゐる。それは何れも夏期に起つた事件である。夏には昨年迄は中等學校等の男女の團體登山が随分多く行はれてゐるがそれ等て前述以外の遭難は今一寸思ひ出せないが、多人数であつたが爲の遭難は数多くあつた筈である。一方では日本の登山に歸れ

目 次

歩手前迄行つてゐるものは數限りなくあるのである。又それ等の團體で一人の故障者も出さなかつたといふやうな事はむしろ例外と思はれる程團體には故障が付き物である。これ等も何とか今少し小人

◆集團登山に警告◆

◆塚本繁松…一

◆山岳氣象について◆

◆研究會報告…三

◆南スマトラデンボ火山◆

◆福井幸男譯…四

◆佐渡山名後書◆

◆川崎隆章…五

◆山の名山の地名◆

◆白馬 耕…六

◆會員通信◆

◆方焄、岩永信雄

◆松澤潤吉、周布光兼

◆織内信彦、沼井錢太郎

◆今川良雄、秋庭俊彦

◆吉阪隆正◆

◆圖書紹介◆

◆會員の聲、會務報告…二三

數に區切つた登山を行ふべきものである事を痛感して來たが、今迄は主として夏山に限つて團體登山が行はれたものだから比較的安全性もあつたのが、近頃では春も秋も冬もこの集團鍊成登山なるもの

が行はれ出したのだから寒心になへないと思ふのである。

この冬には中京方面のある團體が何十名の集團登山を白馬岳に行はうとした事を聞いてゐる。恐らく冬山に於ける最初の大集團登山ではなかつたかと思ふ。この團體の後にいつた一登山者が、先が闊へて閉口したといふ話を聞いたがこの團體は天候不良の爲天狗平方面から引返してゐて事なく済んだ。これが若し白馬近く迄行つて天候急變した場合の事などを想像するとその惨状思ひやられるものがある。その團體は夏にも立山へ大集團登山を行つた旨新聞はでかでかと書立てゝゐた。

所がこの秋になつて集團鍊成登山が俄かに激増した。特に十一月二、三日の休日は最も多かつたやうである。その中で最も驚いたのは富士山へ二百名の大集團が登山するといふ事を聞いた時である。嘘だらうと思つたが事實だとの事であつた。後でそれは御殿場口と吉田口とに別れて行はれるものだと聞いたがそれにしても無茶ではないかと思はれた。言ふ迄もなく十一月の富士山は時によつては一年中で一番仕末の悪い状態になる事もある。そんな時を選んで二百名の大集團登山を計畫するなんてその勇氣は壯とすべきも斷じて

眞の指導者の計畫すべき事ではないと思はれた。私は憂慮の餘り或新聞にその危険を説いて投書したがそれは没書にされてしまつた。所で實際の登山は相當人選を厳にして七八十名で行はれたさうだが幸にも十一月の二、三日は絶好の天氣で、夏山に近い程の状態であつた。富士以外の山に於ても同様であつた。

我が國の山に於ける遭難は主として天候の惡變によつて起つてゐる。十月半ばの三日續きの休日には各地に悲惨な遭難事件が起つたそれは十七日は稀な上天氣であつたのに引變へ十八日は全く思ひもかけぬ天候の急變の爲であつた。山の訓練の少ない小人数の登山よりは訓練のよく行き届いた大集團の方がより安全とは言へても、如何なる惡天候に遭遇しても自信があると言へる程の大集團登山の指導者があるものであらうか。

十一月二、三日には東京市山岳部が金峯山に集中登山を行つたさうだが（これは集團でなくて集中である）この方は指導者達が一應實地を事前に踏んで居り、しかも金峯頂上に萬一に備へて天幕を張つて置いたとの事である。大人数が行動する時には金峯程の山なら少なく共その程度の準備は絶対必

要なものではないかと思ふ。

現在の岳聯の指導者である某氏は整然たる規律秩序ある所に遭難は起らないと言つてゐる事を新聞で見たが、成程丹澤山の表街道や武州御岳や外苑の行軍では大集團も整然たる秩序が保たれ遭難も起るまいが、さうした行動が高山に迄延長された時、そして惡天候に遭遇した時、大集團の秩序が保たれ得るものであるかどうか、考へる迄もない事だと思ふ。

要するに集團鍊成登山とか訓練とかいふ事は専ら低山に制限すべきで、高山へ迄それを延長する事は登山の本道ではなく且危険と思ふ。登山は大自然を對稱とする極めて嚴肅な行動なのだから他迄定則に従つて慎重に行動する事こそ登山の本道だと思ふ。冷厳な自然現象の前には人間のいふ整然たる秩序なんかは如何に果敢ないものであるか山に経験の深い者は誰でも皆知つてゐる筈ではなからうか。無理は禁物である。

時局下團體旅行などは最も禁物と思はれる現在殊更に多人數を集めての集團登山などは慎まればならぬ事であるし、幸ひ最近の集團登山にはまだ大きい事故は起つてゐないが起つてから言ふのでは遅いと思ひ、敢て警告する次第である。その哀情を諒とせられたい。

（山岳氣象つゞき）

颱風の暴風圏内は三〇〇—四〇〇キロである。颱風の中心にある時は當然乍ら暴風圏内に於て中心に接近した時よりも距たりのある時の方が風力は強い。現在行はれてゐる長期豫報はまだ八割あたればよい方であつて氣象學的に扱ひ難いものゝ由である。

次に冬の遭難型な天氣圖に於て眺めると

イ、日本海に低氣壓があり南に高氣壓のある型
ロ、南に猛颱風の來てゐる場合
（第二圖參照）

ハ、九州側に高氣壓、北海道側に低氣壓があつて（第三圖參照）等壓線の多い場合、即ち急峻な氣壓の差のある場合、

以上の諸點につき種々實際例を引いて詳細な説明を與へて頂いた後各自に氣象圖を配布の上丁度その前夜より當日午前中にかけて近畿を襲つた颱風の天氣圖作製を指導して頂く。御講話と共に最も關心を有し乍らその教示を得るの機會の少かつた事だけに我々は非常に興味と満足な以て作圖にあたり深く感謝しつゝ九時半閉會した。

機會を與へられれば携帯用風力計雨量計の使用法、晴雨計寒暖計で山の高さを測る方法等、山で實際に使用し活用し得る諸機械諸方法

のお話を伺ひたいものと考へてゐる。荷田口氏には以前に「雪」本年に入つて「風祭」「讀風祭」何れも氣象學上の隨筆文獻を收めた興味深いもの。古今書院發行）のある事を申添へておく。

（富田記文責在筆者）

當夜の出席次の通り
小川正十郎、木藤精一郎、伊藤幸一、青井竹三郎、廣瀬潔、美木富士哉、安藤博、須々木勝年、影山寅造、山本保、西岡一雄、近藤貞雄、跡部昌三、富田健一、外七名

高き峰に

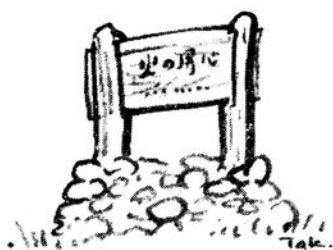
雲の著く如す

我さへに

君に著きなな

高峰と思ひて

（萬葉集卷十四・三・五一四東歌）



山岳氣象 について

關西支部

第四回研究會

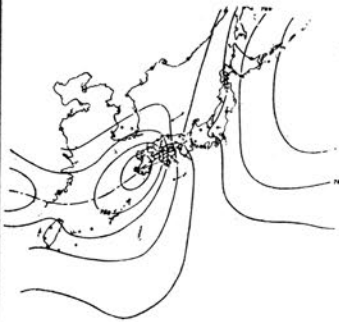
昭和十六年十月二日 於清交社

前回榎谷氏による「山のスケッチ」に就いての研究會の後を承けて今回は我等登山者に最も密接な關聯を有し又登山の成否を決する最重要條件ともいふべき

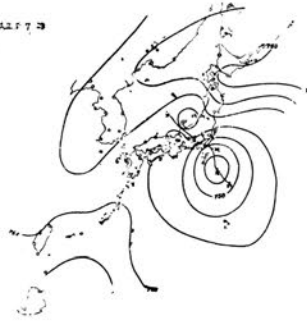
「山岳の氣象」について神戸海洋氣象臺の田口龍雄氏のお話を伺ふ事にした。

從來眞面目な登山家仲間にては最も深い關心を以て研究され乍ら實際に於て直接氣象學者との聯絡結合の少なかつた事は誠に残念であつた。がその點を緊密にする意味に於て又時局下我等登山者として科學的に山を考へる一助となす點に於ても當夜の會合は誠に意義ある催しであつたと思ふ。

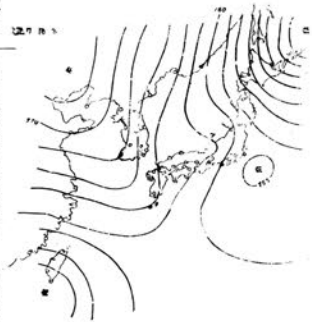
氏は先づ山登りを爲す前健康狀態に關心を持たねばならないと同時に又天氣圖に細心の



注意を向ける必要のある事を述べられた後山岳遭難の氣象學的所見を三の例を以て發表された。即ち登山遭難史（山岳講座第三卷 瀬木三雄氏）と山と雪の受難者（春日俊吉氏）中より生還者があり且氣象學的に見て最もその原因の顯著なもののみを擇ばれたのが次の三例である。茲で附言しておきたい事は登山報告に使用される氣象學的用語の説明が概ね數字のない非科學的なものである爲め異常の場合に折角のデータが重要な役割を演じない事で今後は單に強風、豪雨などとせず出来るだけ詳細な（東南の烈風○○ミリ位の雨量といふやうに）報告をされる



やう心がけて頂きたい事である。第一圖は昭和十三年八月一日南アルプス朝興岳に於ける遭難（一行七名の内四名死亡）當日の天氣圖であるがこうした緩やかな低氣壓で遭難した例は少い。この時は不連續線による豪雨が伴つてゐたので豪雨に耐へる準備があれば避けられたのであるまいか。御承知



も擇び違つてゐる不幸な例である過去二十年來にない大荒れだつた

さうだがその豫見すら出来なかつた颱風豫知の遅かつた時代の遭難である。この頃では山入り數日前から天氣圖に注意を拂へば斯うした遭難は避け得る譯である。尤も低氣壓とか颱風の進路といふものは一日だけの天氣圖を見て豫想出来るものでなく數日の天氣圖を連續的に並べて見て初めて大體の進路を見當づけ得るのである。

第三圖 之と同じく大正の時代

の事であらうが不連續線といふのは簡單にいへば寒暖二氣流の接合地點に於て起る急激なる變化即ち氣流中にある暖かい蒸氣が冷却して雨をふらすのであつてこの線にあたる所はいつも豪雨を伴ふのである。

第二圖は大正五年七月廿七日甲斐破不山（二二一七米）に於ける遭難（中村孝三氏生還四氏死亡）當時を示すものであるが遭難數日前南方に發生した颱風の進路を奇しく

七年十月廿四日。仙臺二中の上級生が教師三名引率の下、今でいふ鍛錬登山の形式を以て藏王山越えをした時のものである。この時は約百五十名の内九名の犠牲者を出したのであるが圖が示すやうに當時の氣壓の配置は全く冬の形式を備へてゐたのであつて（山では十月より三月迄氣象學的に全く冬の狀態である）低氣壓圈内に突き進んで行つたこの集團登山の悲劇も

亦第二例同様天氣豫報不備、不認識時代の尊い犠牲であつたのである。藏王山の國境線に於ける天候急變は餘りにも有名であるが筆者も體驗済み豫報の正確な判斷利用によつて最近大きな遭難のない事は誠に喜ばしい次第である。

晴天は冬期、北に高氣壓、南に低氣壓のある時に、夏はその反對の場合に於て多く見られる。春になると高氣壓が南下し時々切れて高低高低の配置となり晴雨何れも長く續かない形となる。戦争のすんだ後に雨が多いといはれるのは晴天の間に準備なし戦争する。すむ頃雨になるといふやうに行動する爲であつて山行も實際に登頂する時は晴天たらしむるやう行動を豫定する注意を持つべきである。古來の氣象學的な言ひ現はしはさうした氣象狀況を現出する處に於てのみ出るのであつて科學的な説明はつくが場所により異なる事を記憶しておかねばならない。例へば關東では東南風（イナキ）が吹けば晴、西北風（アナセ）となれば雨といはれるが關西ではそれを正反對の事がいはれ又事實そのやうである事である。それから颱風の北進につれ洋上の波も北上するのであるが風よりも波の方が早く、内海の水が暖かくなるのでそれによつて颱風の接近度を知る（二百下へ）

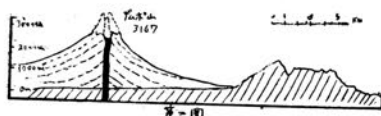
この恐る可き地球の山脈構造はジュラ・アルプス・バルカン・コーカサス・ヒマラヤからズンドアルチバルに到るまで、統一があり、世界の廣大さと思はせる。ゴエメイ山脈中の薄暗い原始林の中に、スマトラの湿地帯がある。その密林の奥の平らな高原には石神の産地があるかもしれない。

雨が垂れ込めたのでヒュツテに

南スマトラ デムポ火山 (下)

Von H. Linger

福井 幸男 譯



入つて休んだ。しばらく経て、奇妙な人々が實際よりも大きく、燃ゆる松明や、刺す様に照る石油ランプを持つて暗闇の中に現はれて来た。其はジャバの苦力で、卑しく、又不安さうに、集つまつて騒ぐ苦力の妻も居た。彼等はヒュツテの周囲の暗闇の中で、喰物を煮肉を炙り、品物を取引してゐた。マレーや支那商人の市の立つた

つたのである。他の隅では石油ランプが明るく照らしてゐる下で賭博をしてゐた。終には給料全部をも賭け、此の短かい一夜を享樂するのである。

その騒ぎで午後十一時まで我々は眠らうとしても、少しも眠れなかつた。午前一時になると旨いコーヒーを持つて來さして、出發した。我々二人のヨーロッパ人の周りにお伽話に出て來る幽霊の様な松明を持つた三人の苦力と私は終日雨で濕つてつる／＼する立樹の間を登り、滑り落ち、呪ひ合つて進んだ。通過困難なる原始林の中に吸ひ込まれた。我々は西の方へと山頂に向つて登り始めた。六人は黙つて辛抱強くこのブツシュなぐり抜け、だん／＼前進する速さが落ちた。漸次に位置は高度を増した。梢がざわ／＼となり、薄暗い深海の底の様な原始林の上に明るい光が洩れた。その光は進む路を照らし突き進むと雨で重い枝で打たれたのであつた。苦悶の結果汗でぐつしよりと濡れた。我々の前進には野獸も少しも邪魔しなかつた。鳥の何の鳴き聲も聞えなかつた。濡れた草木でびつしよりになり又知らない間にやつて來た冷やかな風で冷しくなり、汗が冷えてぶ／＼と震へながら登攀した。梢の裂け目に薄明の最初の

朝の光が洩れて來た時、圓錐形の急傾斜した火山が現はれて來た。この前進の少し後、確かにモエズ河の源流の水が、地の土をさら／＼と流れてゐる處に著いた。我々はこの澤を傳つて行くことにした。植物の珍らしい群生に氣がついていろ／＼と觀察した、この馴れた原始林の登攀は威壓的の巨大さ神秘さ又苦しさの交々の感情が體內に涌きあがつた時、又雨がざあ／＼と降り始めた。常に濕つた枝には地衣類が垂れさがり、少し離れた處には睡葉が一面に密生してゐた。この中を別け進む時、松明の火の傍に大きな蜘蛛の巣も見た。若し到る處に繁茂してゐた。

珍らしい事に低地の木の枝に寄生する植物である羊齒も地面に彼方、此方にあつた。雲の凝縮内境界で霧の境界は、平均約二千三百から四百にかけて始まるものである。推量する路は突然木の倒れたまばらになつてゐる地點にやつて來た。その場所では既に出了太陽の光が我々を驚かした。

松明は既に消されてゐた。雷雨の朝らしい、我々の身體は雨が汗と一緒になつてぐしよりと濡れてゐた。世界は下の方にあつた。未だに島では、方々で稻妻がきらめいてゐたが我々は少しも其に就いて考へなかつた。倒木は到るところひどく倒れてゐた。家か室位の濡れた苔の附いてゐる木にも裂れた目があつた。其を人が飛び越すと生焼けの地衣で覆はれた枝を握つて此から攀ぢ登らなければならぬ。靴を履いたヨーロッパ人に取つては、實際より長かつたので、クライミングの技術が瞬間思ひ出された。最後の五十米から百米まで直接にアルプスの特徴を示してくれた。

喘へぎ／＼最初の平坦な場所に來た。そして東の方に振り返へると。見よ！

なだらかな傾斜！景色に見とれるばかりでなく、口を開ける程の雄大さ！二三米の石楠が眞盛りに徑の傍の樺木の中に咲いてゐた。黒つ／＼には全くなかつたが眞の淡赤色の石楠花であつた。驚異なことだ。三千米以上に色々の花があることだつた。其は高原に相當群生してゐた。

花園の中で一番美しいのは淡赤色の石楠花であつた。

さうしてあるうちに、海拔三千米の森林の限界にまで達したのに氣が付いた。其の限界は氣候的のもので火山の爆發によつたものでない。此の高原から、本當に火山らしい山頂が聳へてゐた。其の山頂からは灰色の縞が横がつてゐる。

そして黒い箇處にあるこけもゝのあるやぶも低い銀松もなくなつてゐた。此の消失點は明確でない火山の新噴火口の周圍に達した。最近は一九〇六年に生じ、併しカスの弱い噴出に限られてゐた。

熔岩も流れ出なかつたのである。午前七時三十分その噴火口の端に到着した。苦力達はこの深い火口の方に走つて行つた。併し私はゆつくりと、持つて來た茶を一口飲んだ。案内人か何か邪推したのか私の傍に來て視てゐた。皆な飲んでしまふとも思つたのかもしれない。彼が自己の所有物と主張するものが、ヨーロッパ人には現はれて來ないものが、私の感覺の中に入つて來た。その茶無しではこの素敵な眺望もつまらないらしい。激しいアルパイトの後に、深い樂しみがある。私は延び／＼と横になつた。この登攀で、始めてゆつくりと休み、ジャバの滞在數週間で、多くの高い火山に登攀した追憶に更けつた。

其の噴火口の端に歩んだ。我々の勞苦は清く報ひられたのだ。直徑二百米深さ四百米恐しく開けた火口でその中には、褐色の朝の陽太の如く魔の國の様に光り輝いてゐる。不氣味の沈黙を持つた火口湖が美しかった。硫黄で黄色く

なつた池の中には、灰色の凝灰石の澄んだ突起がキラ／＼と反射してゐた。たゞ／＼岩の裂け目から、水の深淵からふき出す煙の、閉光ではないかと思へた。總べては静寂で、落石の音も聞へなかつた。私は漸く、火山の内部構造に、しば／＼ある此の不思議について、觀察した。すると又周囲の稻妻が光り始めた。此の火口壁は、高くないので、人はその後の古い大きな、明らかに北の方によつて、併も西の方が水蝕作用でくづれかけてゐる火口の端の残りに注意する。その舊噴火口は高さ約三千八百米もあつたらしい。

先刻石楠花を見たあの高原が、舊火山と、新火山との岐點で、多分舊噴火口の跡だつたらう。廣い火口の中に、デムボス山が、ある噴火で出来たのであらう。又その様な巨大な火力壁を、火山學誌キヤルデラに見る。此等は舊火山の崩壊と爆發物で形成される、その火口の底に、二重の爆發口、即ち新火山を形成するのである。蘭印の最も知られた火山の中には、直径十二軒のジャバ島のテニゲル火山もある。小型で有名なものは、よく登ばられるプロモ火山である。

スマトラ島のは殆んど圓形に伸びてゐる。西の方の視野は隆起し

た長い山脈のバリザン山脈によつて、遮へがられる。その向ふに黒く澄んだ印度洋があり、南にはベシマレーン市が見られる。北にカバ山を見ようと思つたが、八時過ぎてゐたので、深い火口壁を這ひ登つて來た霧が間もなく眺望の大部分を遮つてしまつた。東の果しない平野に、忘れられない閃光が輝いた。其の平野は、まるで見渡し難かつた。

巨大な噴火口の周圍を歩いて行くと、西の方に寄生火山である、ホエキット・ベンコーの小さな火口の殘骸にすぐ目を惹かれる。しかし素早く勢よく這ひ登つて來た雲の爲に雨雲に包まれ、たゞ山中の湖のみが残されてゐた。案内者は、早期の登山者の事を語つて呉れた。ヘルマン・ヘッセも又此處に登つた事を、廣い最もよい通路である東側の最後の登山者は三年前であることも語つて呉れた。何と静寂な場所であらう。この附近の火山には、一年のあらゆる日、殆ど雨がある様に雲の層が厚い。時はたつて九時になつた。冷たく濡れた皮膚がぶる／＼と戦慄へ出した。雷雨が又近づいて來たので我々は死んだ様な緑の陰氣な湖に最後の一瞥を與へて下山したのであつた。

(了)

佐渡山名後書

川崎隆章

會報百九號拙稿「北佐渡山脈縱走報告」に對し、新潟鐵工所體育會藤島玄氏より左の如き有益な御示教を得た。

「(前略)新潟の岳人達は佐渡山と稱し、佐渡を全く小馬鹿にしてゐる傾向があり、登行もせず、研究調査もお恥しい程してゐません、記事に就て氣の附いた點を何かのヒントにもと御報告申し上げます。

ドンテン山に入川に論天山と標札あり最初はドンテンと全然別なものと思つて、イライ損をした事あり。今は渡滿せるも兩津の菓子屋で植物採取によく入る人に會つて聞いたら、論點である由。明治の頃、境界争ひで裁判所騒ぎの時、論點は／＼とやつてそれが地名になつた、と云ふ説。

タダラこれは鍛冶屋で使ふ(鐵山)踏輪(長方形)の意味でないか。」云々

私は今夏渡佐の前に或る人に佐渡に就いて訊いてみたら、その人の曰くに

「私の友達が朝兩津に上陸し、その夜金北山頂に一泊したが、つま

らないと云つて翌朝早々下山しその日の午後の汽船に乗つて歸つた」と云ふことで、私は渡佐の心に水をさへした思ひがしたが、兎に角他人が何と云はうとも、自分のこの眼で見、この感覺に感じた上でなければ、左うした説に俄かに従ふことが出来ないと思ひ、豫定通り佐渡へ渡つたが、佐渡の人々にしても、佐渡の山にしても、私の危懼を悉く押し拭つて私は心からの満足と、山と人とに讃仰の心を捧げて、今少しゐたい心を又次の機會に譲つて内地へ歸つて行つたのである。そして佐渡の山をつまらなさと「小馬鹿」にして勿々に引上げた岳人の心情を憫れに思ひ、かうした人の神經の淺薄さを感じずにはゐられなかつた。

次に、ドンテンを私も地圖通り



解してゐたのを、ロンテンであると教へられ、陸地測量部の誤りをその儘受け入れることなしに、祖先からの地名を譲り傳へてゐる里人の心情を尊ばねばならないことを今更に痛感させられた。尾瀬の抱き返りの瀑に不動滝、クロクハ清水に不老水などといふ繪葉書趣味の白ペンキ塗りの標柱をオツ立て、仕舞つたのもお役人の仕事であつた。地圖上では粘澤を根羽澤として仕舞つたように。南アルプス百間洞に突き上げてゐる福川にしても、私は伏川だと思ふ。何故なら廣河原の小屋を朝立つて、一日が／＼りの磊々たる伏流上の巨岩の上を詰めゆく身には、これは福川としての根據はなく、伏川であると痛感されるからである。

次にタダラは鐵山で使用する踏輪の意ではないかと提案されたが、私の調査の結果は、タダラはタダラの轉化だと思はれる。何故なら踏輪又は鐵工所は近來まではタダラと云はれこれに對する工人を踏輪師と呼んでゐたからであり、現に各地に踏輪を名とする地が残り、附近の田畑には往々にして鐵屑が出、ためにその跡を金葉と呼ばれ、又は鐵屑山とも云はれてゐる。往古薪をタダラと云つたが、現在我々の稱へる薪木なる名稱もタダラギの轉化であると思はれる

★穂高山 信濃飛彈

現在この山塊に入る岳は奥、北、前、西の各穂高、潤澤岳などで、何れも三千米内外。この中、奥穂高は三一〇〇米で最高となつてゐる。以前に穂高の中に含まれてゐた明神尾根は今別に扱はれてゐる。

しかし、善光寺道名所圖會（天保十四年著、嘉永二年版による）を見ると、むしろこの當時のホダ

◆名地の山・名の山◆

(九)



耕馬白

かは今の明神岳あたりがその主體であつた如く窺はれる。圖會に挿入された「安曇諸山」の木版畫においては、穂高嶽と三靈湖（上中下の池）と奥宮などが主題となつてゐる。こゝに云ふ奥宮は今の穂高町にある縣社穂高神社の奥社であり、三靈湖は宮川池（明神池）をさしてゐる。

文政丁丑夏に神河内を訪れた高島章貞氏（穂高村の醫師）の文章

「穂高嶽記」には、穂高嶽には穂高神社の舊趾あり、上古、綿積神の御子である穂高見命の雄據の地であることと述べてゐる。こゝに舊趾といふのは、奥宮のことであらう。

そこで古人の山嶽崇拜の思想と密接な關係のある奥社の建設は、いつ頃であつたかと云ふに、中島正文氏の「神河内志」によると、奥宮の發祥については明和七年の「御嶽御造營日記」があり、その後二十年毎に造營してゐる記録が明治時代まで續いてゐるから、藩政時代以前から奥宮は存在して居たであらうと記してゐる（山岳）。

序に當時の參道はどこを通過してゐたかについて見ると、神河内への登路は蝶ヶ岳越と島々谷から徳五峠（今の徳本峠）ごととなつており、氏子連中は蝶ヶ岳を越えて里宮本社から雨乞のために登つてゐたが之は恐らく享保以前からの習俗であらうとある（同上、中島氏）。して見ると、奥社の安置は、記録や聽書からでも、二百年以上にも遡れる。

穂高神社の祭神について一言すると、穂高神社（延喜式神名帳には安曇郡大一座穂高神社 名神大とあり）、安曇郡穂高村に座す、奥宮は穂高ヶ岳に在り、此所より行程九里餘、本社奥宮共に東面なり、

祭神、穂高見命、石姥女命、瓊杵尊、天照大神の社（三社の北に並ぶ）とある。

しかし祭神については異説があり、三柱の綿津見命を祀つてゐること、阿曇連等はこの神の子である宇津志日金杵命の子孫であるといふ。

安曇族の傳説を讀むと神々の名前が多く出て煩しいので、その略系を參考のために記しておく。伊邪那岐命、三柱の綿津見神（底津、中津、上津）、宇津志日金杵命、宇津志奈賀命、海神綿積豐玉彦、穂高見命、これ以下にいはゆる阿曇連がつづくのである（以上、郡誌、圖會）。

一體、山に關係するホダカ神は、他にも例があり、上州ホダカ神社はその一つである。追貝街道沿ひの利根郡片品村花咲に祀つてあり、背後に聳えるホダカ岳の里宮になつてゐる。併し、場所柄、當地では日本武尊の事蹟との關係が唱はれ、武尊の文字が宛てられてゐる。この奥の同村戸倉の氏神も武尊神社である。

これは、上古において穂高見命と諏訪神とが力を併せて治水の業に従はれたとの傳説に基いての、二神を祭神とする社の普及らしき、安曇郡下には諏訪社も多い。そこで、穂高といふ山名由来で

あるが、當山並に神河内は、阿曇族の祖にあたる穂高見命の垂跡の地であるから、之に因んで山名が生れたと云ふことに傳説ではなつてゐる。

或は又、穂高の穂は秀の意で、抜き出て目につくもの、すべて失つたものは穂である（山岳、廣瀬氏）。秀いでたる岳といふ意味で名付けられたとするのが、傳説によらない解釋である。「岳名の穂は秀の假字にて秀でて高き意なるべし、又、穂高を奥岳とも云ふ」と科野名所集には出てゐる（山岳、鶴殿氏）。

オクダケ（奥岳）といふ呼名は善光寺道名所圖會にも記してあるから、古い稱呼である。又、この山がゴヘイ（御幣）岳と云はれたことは鶴殿氏の連れた山案内類藏の言葉として記載がある。ゴヘイは峯の尖つた幣帛に似た形からの發生であらうが面白い。尤も當時、今の奥穂高あたりを斯う呼んだらしいが、小島氏「日本アルプス」には、今の明神嶽から前穂あたりをさした如く書いてある。當時この穂高は今のやうに名稱が分けられなかつたから、ゴヘイ岳の呼名も、穂高とする山全體への稱呼であつたと見ても差支あるまい。オク岳、ゴヘイ岳いづれも山を崇敬

した當時の人々の氣持がよくうかがはれる。

幕末時代の古繪圖には、寶高明神ヶ嶽、穂高嶽、ホダカ嶽或は地理書の類に穂高、保高など記されてゐる（山岳、中島氏）。

又、穂高町には舊家でホダカ（保尊）姓をもつものがある。恐らく此の村の草分けであつたらう。

要するに、ホダカ岳との關係において、綿津見神系の傳説も發展していつたが、一方、この安曇の地に、これらの神族が勸請せられたのは土地柄から云つて決して偶然ではない。

★小嵩澤山 信濃

二三八七・二米

コタカサワ山と讀ませてゐるが、このタカはタケで、岳をいふのであらう。

他にも例があり、たとへば、尾瀬の笠ヶ嶽が藤原方面で大高と呼ばれるが、この「高」がやはりタケであるのと同じ類である。

★霞澤岳 信濃

二六四五・六米

この山の東側に南下するカスミ澤がある。以前は澤をつけず霞岳と呼ばれてゐた。後立山々脈その他にも澤をつけた山名は多い。

(つづく)



信通員會

金剛より

方 炫

・・・小生春山以來山旅の機を得ずに居りましたが、十月の連休を利用して秋の集仙峯に参りました。

十月十七日朝二人の友と外金剛驛に降りて、神溪寺を過ぎますと秋晴の空に鯨齒状の集仙峯の東北稜の岩稜が物凄くほどの岩壁を聳立させた難姿と紅葉を添えた世尊峯の秀麗なる姿とは闘争の愉しみと純粹なる觀照の歡びとを湧き出させます。動石洞の廣い溪流で晝飯を済ませて集仙小屋への線に入つて行きますと、急に澤は狭くなり、屏風を立繞らした如く屹立した岩壁に晝なほ暗いこの澤よりは動石溪の細く美しい流れを距て、世尊峯の明るい姿が見られます。此處をしばらくして、稍廣い鞍部となり、小屋があります。小屋着が午後三時、夕飯を終える頃は昆盧峯から流れる夕焼の雲と光

が、世尊の峯々を紅色に染め、海金剛の日本海に輝く時の景觀は素晴らしいものです。この小屋は一級登山者の探勝路にはまだなつてゐません。

夜は遙か下の長箭の港の灯がちらつきの星のやうです。眞黒い無數の岩壁に抱かれてゐる小屋の中では、ラテルネの灯の消えゆくまで我々は山を語らひました。

(十月十九日)

秋の黒部より

・ 岩 永 信 雄

・・・今度小暇を得、黒部の秋色を賞べく十五日夜行にて大山村和田に至り、久振りに長次郎老と先祖君の同行を得、十七日小見鏡、宇奈月より小屋平迄日電軌道に乗り、後徒歩にて祖母谷温泉に至りしが、途中祖母谷合流點までの變りし姿には驚き入り候。十九日は雨にて籠城、廿日午後より晴模様となりしかば、奥嶺山中まで様子を見に行き、廿一日には稀なる晴則なる秋晴れに恵まれ、八時小屋發にて尾根を數ぐり、四時間程にて途中白馬連峯、劍、立山、毛勝等の眺望を得、十一時奥嶺山頂上着、ゆつくり展望を得、よい心持になり、多年の懸案を解決し得て愉快に候。(十月廿四日)

南アルプスより

松 澤 潤 吉

十月十六日から五日間、伊那側から赤石、荒川へ入つて甲州側へ抜けました。途中伊那大島から落合行のバスは午前七時廿分と午後二時廿分の二回しかありません。荒川小屋は益々荒廢甚しく、近い將來、避難小屋程度にしか使用出来ず、マンボー尾根も近年改修なく、廢道となる日も遠いことではないでせう。又二軒小屋はこのあたり伐林の中心地となつた爲か類廢的氣分濃厚で、一夜を山峽に憩ふには最早不適當な所となりました。

十八日赤石一帯も岳には雪が来て、翌日からの快晴には溪間の紅葉を映じて、豪華な秋山の饗宴でした。しかしこの新雪で途次同行した徒歩溪流會のパーティーが遭難し、ことに水野氏は空しく逝かれたと聞いた今は、感慨なしには憶ひ出すことが出来ません。

佛印便り

周 布 光 兼

・・・そちらはもう涼しいことと思ひますが、佛印は中々暑いです。来る途中河内から西貢までの間に安南山脈のホンの一端を見る

ことが出来ましたが、凡そ山登り的なものからは遠い感じですが。奥地に入る機會がまだないのが残念です。

(十月卅日)



梅ノ木平の小舎

織 内 信 彦

十一月一日の晝汽車から始つて四日夜八王子降りといふ奇怪な終列車にゆられて歸るまで、なかなか充實した生活をして來た。

會員の藤島敏男氏とこれも會員の交野武一氏所有の藝科の小舎で生活する計畫を立てたのは、いろんな事情で高い山への機會を失つてから、折角の連休を東京にあるよりはと急に思ひ立つてこの梅ノ木平の小舎へ行くことにきめたのは虎ノ門の土曜の午後であつた。

殺人的な夜行を避けた積りの晝汽車は、かへつて失敗だつた。ハイカー諸君は、その目的の山野よりも、かうした列車内の座席争ひに練成の場所を窺見してゐるらしかつた。

茅野驛前の永明館なる旅館に一泊。翌朝は早くから驛前の喧騒な人聲に眼を覺ましたが、東京府岳聯といふ旗を先頭に押し立て、一列縱隊に行軍して征く岳聯の一行を、時間に餘裕のあるわれわれ二人は宿屋の二階から見送つたのであつた。

梅ノ木平は小齊の湯でバスを下りて、高原ホテルへの道を少し登つてから右へ三十分も登つたごく閑静な見晴らしのよいところであつた。

附近は落葉松、榎、白樺等の疎林が一面に續いてゐて、早い流れの小川が小舎前を北から南へ走つてゐた。眺めのよいことは天氣晴朗だつたせいもあるが、ほんとうに素晴らしいもので、かういふところに、このやうな洒落たヒュッテを建てた交野氏の慧眼に敬意を表したくなるやうである。病後の爲同君が同行されないので唯一の心残りである。

まづ藝科山から始まつて、横岳、鍋枯山とその附近の特有の丘陵がゆるい拋物線を見えなくなるまで

ひいてゐる。その向ふに赤岳、權現岳、横岳等八ヶ岳の岩壁が白い雪を交へて手にとるやう。北岳、駒、仙丈等の山脈、御岳の大きな山容が紫色に霞んで諏訪の盆地を隔てゝ望まれるし、やゝ高いところへ一登りすれば、槍、穂高、乗鞍その他信州一圓の山々が指顧のうちにある。

小舎生活を快適なものにする爲には、まづ小舎を清掃することだ。収容人員五、六人といふ小ぢんまりしたもので、四角い食卓とストープに椅子、壁にははられた海外の山の寫眞、凝つた燭臺、寢室は二段で藁布團のベッド式である。薪木は澤山あつて、ストープが眞赤に燃える。その上で熱いブラザルのカフエが沸々と音をたててゐる。

國內に物資が不足を告げてから人心がひどく荒んで、たとへば、物資を人達の態度などまるで悪い方へ一變してしまつた。決していふことだとは思はれない。物の不足は時節柄あくまで忍ばねばならない。しかしもつと大切なものが日増に失はれていくことは、物の不足以上に大きな損失であらう。同じ意味で、山へ行く人達が一律に正規化されてしまつて、山でのゆとりといふやうなものが考へられなくなつてくることを、いふ傾向だとは思はない。といふやうな

ことを、この床しく、つましやかな小舎の生活からひろひだしたのであつた。

陽當りのいい小舎前に蓆袋を並べてパイプを啣へたり、山靴の手入れをしたりしてゐると、枯れきつた葉がカサカサ鳴りながら舞つてくる。この邊りやがて一雪くれにすつかり冬になるのであらう。

晝間は快晴、夜は満月。なんと恵まれた休日である。庇が長いので月光は室内まで届かないが、外は晝のやうに明るかつた。薄の穂が白く光つてゐるのはひどく印象的であつた。備付けのレコードを聴いてみる。シューマンのツィゴイネル・レーベンだとか、キプニスの唱ふエルケ・ニツヒやパデレフスキのピアノなど月光の夜に特に相應はしいものばかりであつた。

こんな風にしてゐる三日間といふものをこの山小舎に過してきて得たものは頗る快適な氣分の收獲であつた。山へ登つたといへばわづかに、大石峠から八ヶヶ峯へ四時間ばかり歩いただけであつたが、それでも、行軍に劣らない山への精進の一つの仕方であることな、かうした生活のなか、確信してきただけであつた。



小蛇尾川流域

沼井 鐵太郎

十一月一日夜行上野驛發、二日西那須野驛から關谷を経て蛇尾川畔萩平部落に行き折柄來合せた慕沼の印南照吉(四五歳)といふ土地の山通谷通を案内に契約、大蛇尾・小蛇尾の入口を調査後落合から兩谷を分つ尾根に數百米登つて小蛇尾川谷廣河原に下り小屋掛野營、三日本谷を通り助七澤落合から案内と別れ同澤を上つて日留賀岳・彌太郎山尾根(地形圖稱呼)を越えシラン澤左岸のトロ道に下りて「木ノ葉石」の所から驪原・金澤街道に出、古町から最終のバスで西那須野行歸京。同行會員岩永信雄氏。

今年正月志賀高原で左足を傷めて以來所謂ハイキングさへ自重してゐたが、九月越百・南駒・ケサ澤と歩いて稍自信を得たので久しく訪れなかつた此の地域に入つて見た。大蛇尾には大正十年、十一年にかけて三回入つて、第二十一回

八ヶ岳と愛鷹山に拾ふ

今川 良雄

の小集會で話した事もあるが(山岳十七第一號(大正十二年七月)一一頁)、其の時の記事も事實と少し違つてゐるし、又會報八十二號(昭和十三年十二月)五頁二つの「遊行」にも編輯者は私達の探行を見落してゐる。大蛇尾源流の遊行と大佐飛山には昭和八年八月會員加藤恭平、淺野松藏兩氏の行(會報二十八號)と昭和十三年東京市山岳部星野氏一行の記録が知られてゐる、小蛇尾の方は今迄登山記録の發表されてゐるものは無いやうだ。然し此の谷も約三十年前には大仕掛な伐採事業が行はれてゐたし、今でも獵師、岩魚釣師などが入つてゐるやうだ。今後もう少し續けて調査登山してからまとまつた物を書いて見るつもりだが、開け切つた箒川溪谷と山脈一つ隔てゝこんな靜寂境がある事や、其の地域一帯がハイカー達には愚か先蹤登山家にも未だ殆ど試みられてゐない事は確かで、其の點中村敬氏著『那須』や、『東京附近山の旅續』の記事通りだといふ事になる。

十一月十六日單獨で再蛇尾川流域へ足を入れた。今度は萩平から大蛇尾川左岸の黒瀧山の前山(一四一・三七米)へ尾根道の往復と、大蛇尾入りの道を少しく探つただけである。

昨秋焼失した本澤温泉は目下立派な新築を急ぎつゝあります。晝食を御馳走になりましたが、鹽鰯二尾に味噌汁とで一圓也は時節柄とはいへ安くはないと思ひます。尙こゝの經營になる硫黄石小舎は本夏完成、燃料まで備付けて、冬期使用を待つてゐます。

次に愛鷹山に熊の居る話——先月十八日縱走すべく原驛から登りましたが、中腹から降られ、縱走は斷念致しましたが、折角來たのだから頂上の室で空腹でも癒してと、全身ズブ濡れのまゝ一人トボトボ辿つて居る時でした、丁度水場から約百米程登つた頃、カスの中に浮んだ黒い大きな動く影、小牛程もある大きなヤツでした、お馴染のあの圓い頭に尖つた鼻、距

離約三十米。ガスと雨音に人間の近づくのも気付かなかつたものと思はれます。木に登らうかとチラと考へた次の瞬間、廻レ右、早駆け……。追つて来る様にもないので一安心。ヤツも驚いて逃げたのでせう。此の山に熊の居る事は算盤外だったので、一寸驚かされました。麓で聞いて見ると、『熊が居るとか聞いたことはあるが、見た事はねえズラ。』との事。

今年は運悪く南アへの出発前日から病名小町の熱病で一月程ね込んでかき入れの夏山プランを流してしひ、應召で抜かれた山行を取り返さんものと相當張り切つて居ましたが、結局思ふ様に山行は出ませんでした。(十一月十四日)

福岡より

秋庭 俊彦

十月下旬から福岡市内西公園下の親戚の家に來て居ります。一月半ばまで此地に滞在の豫定ですから、數回は山行出来るつもりです。

明治節の佳日に筑紫山塊の背振山へ單獨行をやり、十一月十五日には、九州日報の登山會に参加して三群連峯を縦走いたしました。福岡市の三方をめぐる山々は、開

て、日没までに一つの山を十分に味つて来るのがばんいゝやうです。日歸りに適した山は、そこにも此處にもあつて、日曜日に寶満山、三群山、筑紫耶馬溪、背振山、雷山等へ出かけるルツク姿はなかなか賑やかです。福岡日々新聞後援の登山會、九州日報の登山會など非常に利用されてゐます。

團隊登山のうちには、嚴格な「練成登山」も行はれてなおりますが、あまり規矩に捕はれず、相當樂しめる團隊氣にある團體も多いやうです。

そして此地で異色あるのは、信仰の山が多いこと、史上に由緒の深い山々が多いことです。山々の清淨が割合亂されてゐないのは、この特色のためかと思はれます。

序に、この地へ來て一ばん困つたことは、今では五萬分の一の地圖が買切れになつてゐて、今後はもう取寄せられないだらうといふことです。市中の本屋を漁つても、此地方の山岳書も容易に手に入りません。私は竹内亮氏の「筑紫風景誌」と關口泰氏の「高千穂」の二冊をやつと見つけ出したわけで、従つて、九州地方の山を歩かうとする方は、東京で豫め圖幅、書物等を求めておく必要があり

× ×

新雪の富士にて

吉阪 隆正

天氣豫報が盛に晴を知らせてゐるのに、東京の空はどんよりと閉ざされて、いつこの雨が終らうと思へない。それでも土曜の午後あはてる様にして富士吉田に向つた。最近御老人の御伴ばかり仰せつかつてゐたので、それも亦別な意味で得る所は多いが、どうも肉體的に惰弱に流れるおそれが多分にある。それで合宿訪問によつて張り切りを取り戻さうと企てたのだつた。

吉田の驛前でなかの冷たい親子井を食はされて、淺間神社を過ぎる頃に終に腹の中で喧嘩になつたと見えて頗る不快。早速そこの林間に蹲んで追ひ出してしまつた。ユラユラするランタンの光と共に一入長い馬返へしへの路をのぼる。夜である。上に一面に霧が立ち込めてゐて、いろいろと思ひを巡らすには何よりの雰圍氣だ。

學生時代に殆んど具體化してゐた遠征の事を、現在の狀態でもう一度實現可能ならしめるには……などと考へて見たり、或ひはもつと文明の利器を用ひた登山法、例へば移動組立式の山小舎をベースキャンプに利用するとか、又はとつ

びようしもない事の様だが氣球で山頂に至る方法などと空想俱樂部とまでは行かないまでも勝手氣儘に夢をたび廻つて見た。

五合目の小舎には番人はゐなかつたが、満員の盛況であつた。このあたり既に十數裡の積雪があり一面に眞白だ。雨戸を開けたまゝで寝てゐる二階の人達が何かほゝえましく感じられる。時に廿三時目ざとい横濱高工の方が一人だけ起きて火をかき立てゝくれた。

翌朝雲海の上を朝日の走る頃には我々は早や樹界を出て頂に向つてゐた。新雪が積つたばかりでまだ風にも締められず、例年の硬い滑らかな秋の富士の肌ざはりは見られなかつた。二年の新人が膝まで没するラッセルをしてくれなかつたら、或ひは日曜一日に頂上を往復して東京まで歸ることは出来なかつたかも知れない。從來秋の富士といへばあの氷の様な硬雪を連想してゐた私には、アイゼンを空しくユツクの中に入れたまゝ一萬尺を上下するのは全く意外だつた。恐らく合宿に入つたリーダー級の達人とて同じ氣持であつたのだらう。この合宿の一つの目的として、アイゼンの技術の修得といふ事が考へられてゐただけに當てが外れた氣持であつたらうと思ふ。それでも「アイゼンはない

た」といふ經驗を持たせる意味で皆に付けさせたのだと思ふが、もしさうでなくて、唯單に初めの計畫がさうだつたから、雪の狀態も考へずに着用したとすれば之は大問題である。先日聞いた遭難報告でも感じてゐた事だが、臨機應變といふことの不足、自分等が今山のどういふ狀態に面してゐるかの認識の不足と、それに對處することを知らないこと、例へば初め小屋まで行く豫定だつたから、どうでもそこまで迫りつかうとする様なことが慘事の大きな原因の一つとなつてゐるといふことだ。固執といふ事は恐ろしい事だ。これは何も山に限つたことではない日常の我々の生活にも、日本全體の將來などについても同じな危惧は懷かれる。但し斷行といふことは別である。

一面の雲海の上から世界を眺めてゐると颯とした下界での自分の姿が實にみづかに感じられる。すぐ向ひに堂々と坐つて、左に大菩薩や秩父の連山をひかへ、右から後方にアルプス連峯をひかへてゐる八ヶ岳の様に落ちついて、日本一の山富士とも何ら臆せずに対してゐるそんな人間になつた。

(十一月廿四日)



図書紹介

優松帯

織内信彦 昭和十六年
八月朋文堂刊行 B6版
三〇〇頁 挿畫一
(一圓八十錢)

本書は目次に據れば四ツの部分に分たれてゐる。即ち、「小谷旅情」外八篇、「信濃の旅と蕎麥」外八篇、「三寒冷を作る話」外三篇、「早春の谷川群衆とヒツゴ澤」外三篇及あとがきに代へてとして「優松帯」の一編である。

上田徹雄氏の装幀であつて、同氏の畫が一枚巻頭を飾つてゐる。勝沼あたりから南を眺めた圖だそうである。昭和五年の「劍岳西面紀行」から當會々報に掲載された昭和十六年一月付の「冬の黒部雜記」に至る約十一年間に渉る登山紀行

や「登山と榮養の話」や「登山食糧の覺書」等の研究覺書を集めたものである。「あとがき」にもある通り、いづれも二十代に書かれたものであつて、此書を以つて二十代の山への訣別書となし、更に三十代の山への出發を約束しやうとしてゐる。書中所々に見られるやうに著者は「一ヶ月ばかりの豫定で」山歩きに出かけ「十日以上も牧場小舎の一室にくすぶつてゐる」ことがあつたり、「山へ行かない月のない」などこの二十代は誠に多くの月日を山に於て暮してゐるが、同時にこのことによつて大きな影響を受けてゐると書いてゐる。後年に至つてもこの二十年代を回顧する毎に心にうるほひを與へることであらう。著者は「學生で閑暇あるのをいゝことにして」このやうに山へ入つてゐたのであつたが、著者はかりではなく、その頃の山を好む學生たちはいづれも多くこの月日を山で過したものであつてその點に恵まれてゐたと言へるのである。現在多くの學生の話によれば到底このやうなことは許されない。爲し得なければ止むを得ない、又その時期時期によつてやり方を變へる必要があればそれに適應したやり方をしなければならぬが、希くは學生たちが萎縮させ又は功利に走らせるやうなことはないやうに。人々がその青年期に於て美しく楽しい多くの思出を持たむことを願ふ。書評から離れたが讀んでゐるうちに左様に考へて來たのであつた。

體力旺盛な時期に於て岩登りであるとか嚴冬の登山であるとかに於て熱心を示すが、しばしばそれが短期間で終り一向實を結ばない事がある、のち／＼まで山について更に多くを知らうとし山によつて心を豊かにする所がないといふことを言つた人があつたが、この著者の如きは學生の頃から、單に山へ登るだけではなく常にそこに伴ふ「旅情」に楽しんでゐることは隨所に窺はれるのであつて、三十代の山が終れば四十代の山を自ら約束し、後年假令、大きな山登りの出來ない時になつても常に一人山から離れまいとしてその山麓だけでも訪れる人々の内の一人であらうかと思つたのであつた。

私は中でも「劍岳西面紀行」(昭和五年)、「上高地と牧場の四季」(昭和九年)等の初めのものを好む。又「登山と榮養の話」や「登山食糧の覺書」等を興味深く讀んだ。著者はこの方面の研究者であつて東京農業大學山岳部報告にもそれらの研究は發表されてゐる。登山食糧については登山者は誰れ

も關心を持つ。殊に今後の山登りについて。例へば、來るべき積雪期に十日前後の山歩きをしようとする場合の食糧については私自身どうしたら良いのかまだ見當がつかないので、このやうな人々の助言を得たいと希つてゐる。まづ從來のパン、オートミール、バター、コナミル、加工肉類、モチ等の携帶に便利なのは一切斷念しなければならぬ、それと同時に炊事の燃料としてアルコール、ガソリン、石油等も携帶は出來ないから山小屋の内でない場所での炊事は困難になるわけである。

それよりも、國民の食糧又は榮養についていろいろのことを知りたいて希つてゐる。現在、戦争が始まつてから五年になるが食糧配給の機構はどうなつてゐるか。何故腐敗したものを食はされたり買はされたりするのか。又營養について殊に發育期のものに對して當局者はどういふ風に考へてゐるのか。例へば私は到る處に出てゐるビタミン剤の藥品の廣告等を見てもそう思ふのである。これらの藥品を幼児の時より毎日何錠とか飲み續けることが果して製藥業者の唱へるやうに強壯な身體を作り上げることになるのかどうか。たま／＼ドイツの榮養學者が人造ビタミンの弊害を唱へ、兵士の食料等

についても、特殊任務の兵士に對しては合成ビタミン剤を與へることとはあるが、多くはビタミンを多量に含む食料を與へ、それからビタミンを攝取し得るやうに研究してゐるといふ記事のみたり、又ビタミン過剰の害といふことをきいたりする時我國に於てはこれらの事柄について如何に國民を指導してゐるのかを知りたいと思ふのである。再び書評から離れたやうであるが、著者が益々その方面の研究を積まれて一般國民を啓發されむことを希ふのである。

著者はあとがきに於て「もとより私は文章をひれることを以て生業とするものではない」と斷つてゐるが、文章についても決して無關心な人ではなく寧ろ大いに興味を持つてゐる人である。山の本と雖公衆に配布され又は市場に販賣されるのであるから、隨筆にしる譯にしる生業ではないからといつてその不備から逃れることは出來ない。他の人々からたゞかれない爲めに、生業としてゐない人々は却つて持つて行き所のない責任や又は自責の念にかられる事も多いことと思ふ。(田邊主計)

×

×

×

×

武田久吉氏編

「尾瀬と日光」

を讀んで

山溪選書3、一三×一八種、總頁三四八、口繪寫真圖版三二、折込圖版三昭和十六年八月十日、山と溪谷社より初版發行、定價二・三〇、裝幀塚本閣治氏、扉畫加地春彦氏。

先づ編者の「序に代へて」の一文を讀む。「私の登山史は、日光の山から始まつたといつても好い。……尾瀬への初めての旅は、矢張り日光からであつて、……それにしても、私の心の奥には、日光山の名は第二の故郷ともいふ可き程の、反響を喚び起すに十分である。」といふ句を取り上げて見ると、本書は奥付に明記されたやうに「日光と尾瀬」とされた方が編者の心持にぴつたりと來たものでは無かつたらうか。然し全部を素讀してしまふと力點は尾瀬にあるやうに感ぜられ、成る程かういふ編纂は難しいものと考へるに至つた。

駄言恐縮千萬であるが、兎に角時局に皮肉な程新著の多い今日、尾瀬と日光を眞に知る爲の好伴侶として本書を第一に推奨したい。内容は概説、山岳地形、地質、瀑布、植物、尾瀬の科學、高倉宮御舊蹟、考證、勝道上人と日光の開山、山村民族雜記、短歌、登山案内、日光・尾瀬雜筆、尾瀬の發電問題等、編者武田氏を始め川崎、安齋、大塚、館脇、安達、柳田、木暮、金子、平野、矢島諸氏の十五篇。多くは再録のやうであるが、各方面の權威名家の執筆された事として、流石にがっちり組まなくては讀破出來ない。地形圖もろく／＼讀めないやうなブツイド岳人には貰つてもらふのも勿體ないだらう。

なほ本書紹介の序で一言したい事は、此れ等の山地の愛好者、通人が生半可であつてはならないといふ事である。換言すれば、尾瀬を守る側にあつても無反省では困るといふ事である。昭和十五年の八月であつた。久し振りに至佛山を越えて尾瀬に入つた筆者は、檜枝岐小屋で武田さん御一家の山行の噂や、其の昔星大吉氏と一緒に始めて至佛に登つたのは貴方でしたか、といふやうな嬉しい談話の一時を過してから辿り着いた旅館まがひの湖岸の山小屋で、同伴の次女の持物紛失に關して示された態度に就て實に不愉快な印象を得た。小屋の主人非常時不在の後を守る人々の餘りにも捉はれた名譽心の狭さ反省無さに、筆者親子は驚愕憤懣として舊蒲平の方へ立ち去らざるを得ないのであつた。大局の事實を認めないで物事を何處迄も綺麗にして行かうとするのは無理である。此れはほんの一例であつたが、尾瀬を愛護し利用するに、當事者と局外者、先蹤者と訪問者との間に、もつと相互の諒解が進まなくてはならぬ事を痛感する。

幸ひにして本書の如きは、聖地は聖地として科學のメスを振つた良手引である。讀者としての筆者は今後の再版改訂又は姉妹篇を期待して、本書出版を心から祝福するものである。(沼井鐵太郎)

山と雲と蕃人と

鹿野忠雄著 昭和十六年八月
中央公論社發行 四六版三二
三頁 寫眞六葉 地圖二葉
布裝 價二圓五十錢

會員鹿野氏の新著である。

もう十三四年も前になるが「山岳」誌に、矢繼早に、著者が臺灣の登山紀行を發表された當時、突如として現れた、この若い登山者の、燃え上るやうな情熱と、食欲にさへ思はれる征服慾とに、余は目を見はつたのをおぼえてゐる。

大正末期から昭和の始めにかけて、著者が臺灣の高山を大袈裟に

言へば片ツ端から征服していつたその武者振りは、まことに華々しいものがあつた。

殊に一九三一年の夏は最もその驍足な伸びた年である。本書の大部分を占める、新高南山と南玉山の登攀、新高東山の登攀、秀姑巒山脈の縦走、尖山單獨行、東郡大山塊の縦走、マリガナン山より再びマボラス山へ、の六章が一夏の收獲であり、その多くが初登攀であるに至つては、その健闘健筆に、たゞ感歎の聲をあげるのみである。

自序に「蕃煙漂浪とした其の當時の蕃地、山高く森茂り、豊富な生物と多彩な蕃人の生活に織りなされた臺灣の山々は僕を完全に虜にした」とあるやうに、著者が未踏の峯頂に激しい闘志をもつて挑むと共に、またそれらの山々に愛着を抱き、蕃人とその生活に深い親しみを持つてゐることは、本書を通じて窺はるゝところである。

近年内地から多數の隊員をもつて組織した遠征隊が屢々臺灣に送られてゐるが、本書はかゝる遠征隊の報告とは、全く異なる趣に充ちてゐる。それがまた本書の特色であり、著者の獨壇場であるとも言ひ得やう。

會員沼井鐵太郎氏の「臺灣登山小史」(山岳第三十四年二號)に據

ると、著者の臺灣山岳に於ける足跡記録は本書收むるものゝ外に尙尠くない。余は、更に著者の新稿發表に期待すると同時に「臺灣を足場として東南亞細亞の探検に待機してゐる」著者の健在を祈る。(藤島敏男)

日本の山々其他

島田 武 時

私達が山の寫眞を觀て深い感動をうける、それはどんな寫眞であらうか。私はそれは山岳の素直な表現が卒直に私達の胸をうつもの又は、山自身のもつあの迫力がぢかに私達の心に迫るものであらう。私はかうした寫眞を名山寫眞であると思つて居る。

最近塚本閣治氏の寫眞集「日本の山々」が出版された。

はしがきに云ふ。眞に止み難き山岳への思慕が氏をしてかゝる大量の山岳寫眞を得させしめたものであると。私は此が山岳寫眞を得んがために山にゆかれなかつたことを喜ぶのであす。

「日本の山々」、全篇を通じてみられるのは同調の寫眞と煩雜に現はれてくる人物の不愉快さである。そして非常に力を注いだと思はれる印刷技術の優秀さである、

恐らく塚本氏は山と人との關聯を多く意圖されたものであらうが結果に於ては失敗であつた。實にお芝居氣たつぷりな氣障な寫眞が多く散見される。十一圖の空木岳の小屋、十三圖のもの、二十六圖の八方尾根を登る。三十六頁の人物、四十七頁の寫眞、百二十頁の寫眞、百六十四圖胸ヶ岳の雪庇等皆いやなものである。まして百五十六圖豪雪の寫眞に至つては塚本氏は所詮名所寫眞屋の繪葉書の感覺を脱せられないものであるうか。

私は塚本氏にもつと卒直な、素直な寫眞を望みたい。その良い例は七十九頁會津駒ヶ岳、(赤外寫眞)百十七頁酸ヶ湯澤源頭を歴する八甲田大岳を擧げ得る。塚本氏はなぜかうした寫眞を主として發表しないのだらうか。

これに引きかへて四十九頁五十八圖尖頂の如きは同じ人の寫眞とは思はれない。實に愚劣な誇張感をもつて居るではないか。あの猿廻し同然の二人の人物に注意ありたい。

私は塚本氏は優秀なカメラマンであり今後とも十分に登山に活躍できる人であることによく知つて居る。希はくば氏は今後その優秀な技術と實踐を持つて山岳を卒直なすなほな把握によつて寫眞せ

られんことを望むのである。

(日本の山々 山と溪谷社出版)

×

「山と雲と蕃人と」この書物の殆んど全部は一度「山岳」誌上に發表されたもの故別に紹介することもあるまい。私はこの書物を讀みかへして今つくづく思ふことは全篇を通じて感ぜらるゝ鹿野氏の臺灣の山々未知の山々に對する登高の意氣である。登山の様式も、登山の心構へも、時代の流れに依つて變化する以上に急激に變化する現代の社會狀態に於てもつとも必要なのは飽く迄もその目的を追究することの意氣であると信ずる。内地の山でも経験することであるが二度三度と飽くことなくその目的を追究することはいくらか時間的に餘ゆうのある場合でも難しいことである。私はこの鹿野氏の努力と意氣を特に高く評價したい。

谷川岳、立山連峰の冬期登山を禁止することが眞面目に論ぜられるこの際特に痛切に感ずるのである。

冬期登山は多分に危険であらう、しかし夏期登山は今から三十年も前には現在の冬期登山よりもつと危険視されたであらう。日本の當局者はなぜ冬期登山を深く究明しやうとしないのであらうか。登山許りでない、あらゆる社

會的事象に何故にかゝる禁止と云ふ最後のそうして安易な結末をつけたがるのであらうか。吾々は消極的になつては不可ない。不可能を可能とする意氣と努力とな捨ては不可ないと思ふ。

昭和十七年度

山日記

物資不足の折柄ではありましたが、今年も昨年と殆んど同じ體裁で「山日記」の第十二輯が出来上りました。

(定價一圓五十錢)

新に挿入した主な項目は

「亞細亞の高山表」

「地圖使用上の注意」

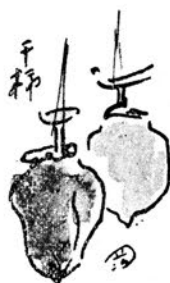
とであります。

概念圖は「奥利根」の代りに

「尾瀬日光」を入れました。

山小屋、山案内、登山團體一覽は勿論最近の調査によるものであります。會員頒價一冊に付き一圓三十錢(包裝費、送料共)であります。

會員の聲



會員各位に御願ひ

目下ガソリン統制、燃料節約の爲、自動車の運轉に制限を加へられ、従つて交通に異常の支障を來たし、登山者の不便も亦少なからず。各山地に於ける交通機關、殊に自動車の連絡狀況を知ることには一般登山者にとつて、喫緊の必要に付、各地元の狀況を御調べの上日本山岳會々報欄へ御寄書を煩はし度し。

冠 松次郎

會務報告

十一月役員總會

十一月六日十八時四十五分事務所にて開催。

出席者。鳥山、武田、高頭、冠

木村、茨木、沼井、藤島、逸見、

富田、金山、塚本、山口、吉澤、

青木、早川、吉阪。

委任。小島、木暮、横、西堀、

三田、藤木、大島、額田、中村、

榎谷、津田、今西、中野、田部、

高野、角田、福島、三木。

議題(議長——鳥山理事)

一、會費變更の件。會費變更は行

はざることをす。但し會計年度が

三月迄延長されたる爲その間の會

費問題は次回に考慮すること。

一、家族會費一部減額の件。減額

を行はす。入會金に於ても同じ。

一、岳聯報告。冠、吉澤兩氏より

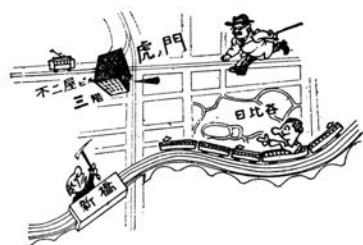
報告あり、本會は今暫く靜觀する

こととす。東京府岳聯についても

同じ。

一、山日記内容報告(吉澤幹事)。

(イ) 増加したるもの——七千米級



高山名。(ロ)軍機保護法に關する記事は大體抹消す。(ハ)十一月末發行豫定。

一、講演映画會の件(塚本幹事)。

ホスター、チラシ、切符出上りたるを配布援助方懇請ありたり。

一、編輯報告(イ)山岳—逸見幹事より第二號内容につき説明。

(ロ)會報—用紙等の關係より印刷所を變更する旨塚本幹事より報告。

一、關西支部報告(富田氏より)

一、登山年譜の件(沼井評議員)

一、學生懇談會の件(金山幹事)

一、入會申込者承認決定十八名。

圖書寄贈

蒙古學 三冊 善隣協會發行

桑原武夫著

フランス印象記

弘文堂

右田邊主計氏

關口泰著

山湖隨筆

那珂書店發行

右著者關口泰氏

窪田空穂著

日本アルプス紀行 二見書房

右二見書房

加納一郎著

極地集誌 朋文堂

右加納一郎氏

加藤泰三著

霧の山稜(特製本) 朋文堂

右加藤泰三氏

高柳春之助譯

エヴェレスト探險記(一九三三年)

年)

右發行所 岡倉書房

後藤興善著

又鬼と山窩 書物展望社

右高橋文太郎氏

志賀重昂著

日本風景論(第十二版)

小島烏水著

山水無盡藏(明治三十九年發行)

遲塚麗水著

山水往來(明治四十三年發行)

小島烏水著

烏水文集(明治三十九年發行)

杉村楚人冠著

ひとみの旅(大正二年發行)

利根水源探險隊著

大利根水源紀行

窪田空穂著

日本アルプス從走記(大正五年)

大町桂月著

富士行(大正八年發行)

小島烏水著

日本山水論(大正五年發行)

杉村楚人冠著

越後記(明治四十四年發行)

小島鳥水著

不二山(明治三十九年第五版)

伊藤銀月著

日本風景新論(明治四十三年發行)

原口亨著

赤石白峯山脈縱橫記

小島鳥水撰

旅行談(明治三十五年發行)

田島勝太郎著

山行記

小島鳥水著

木蘭舟(明治三十三年發行)

蘭契會編

日本アルプスと大井川

松永安左衛門著

山登り

田山花袋著

旅すがた(明治三十九年發行)

小島鳥水著

山水美論(明治四十一年發行)

右二十冊 吉田禮二氏

圖書購入

今村學郎著

日本アルプスと氷期の氷河(岩波書店發行)

受贈會報部報雜誌

立教大學山岳部 部報9號

關東旅行俱樂部 旅路十一月號

廣島山岳會

會報十一月號 山小屋十一月號

山小屋十一月號

熊本アルカウ會 會報十一月號

聖山岳會 聖9號

鷗翔山岳會 會報三二號

山昆虫會 會報十一月

大阪山岳會 山岳趣味十一月

日本アルカウ會 アルカウ趣味

沖電氣山岳部 部報十一月號

東京アルカウ會 會報十一月號

大阪探險俱樂部 白峰十一月號

京都山岳會 京都山岳十一月

橫濱山岳會 會報十一月號

登山とスキー 十一月號

國立公園協會 國立公園九、十月

東京府山岳聯合會 會報一號

臺灣山岳會 集報十一月號

雁ハイキンググループ 雁十月

東京高嶺會 高嶺十一月號

中京山岳會 會報十一月號

東京山ノ會 會報十一月號

津峠ノ會 峠三三號

日鐵八幡製鐵所山岳部 部報十月

泉州山岳會 會報十一月號

東京峰友グルッパ 月報十二月

帝國山岳會 岩雪崩夏山號

熊本アルカウ會 會報十一月

銀嶺山岳會 會報十月十一月十二月

山小屋俱樂部 會報九六號

明峯山岳會 M M C 十二號

Sierra Club Bulletin August, 1941

The Mountaineer October, 1941

November

The Geographical Journal July, August 1941

京都山岳會 會報十二月

東京地學協會 地學雜誌十一月

東京野歩路會 山嶺十二月號

白樺旅行會 白樺百十二號

廣島山岳會 會報十二月號

終身會員二變更

柳澤悟(會員番號九五七番、大正十五年二月入會)昭和十六年度

より終身會員ニ變更

關西支部役員會

十一月四日 於支部ルーム

出席者 西岡、富田、木藤、松井

津田、栗飯原

一、研究會の件 吉本應天氏の

「大峰大臺の生活を訊く」を十

三日開催と決定。

一、改組記念講演會の件 講師下

阪日未定につき富田幹事上京

の上、懸案中の横副會長下阪

の件と共に交渉決定方を依頼

す。

一、小集會の件 決定に至らず。

一、山日記の關西方面日程表改訂

の件 本年度に間に合はざるも

本部山日記擔當者へ提議しお

く。

一、入會希望者の銓衡方針その他

本部への質疑事項審議。

有志晚餐會記

秋冷を感じる十一月十一日の夜
本會々員一千名突破の内祝を兼ね
ての有志晚餐會を虎の門の曙荘で
催した。始め申込者少なく世話人
は相當氣をいんだが、結局集まる
者左の通り二十五名に及び晚餐會
に相應しい人数となり、和やかな
談笑のうちに秋の夜長を忘れて過
した。會費の割には御馳走があ
ると世話人をほめる人も出たが
後で會計となつて一人前の料理代
の請求に約束と相違があり一悶着
起つて世話人は苦勞した。然し一
同はそんな悶着は御存じある譯も
なく上氣嫌裡に散會したのは九時
を餘程廻つてゐた。尙次回の世話
人は辻莊一、川喜田莊太郎兩氏に
依頼する事となつた。(世話人神
谷泰、土屋鎮雄、塚本繁松)

出席者 高頭仁兵衛、木暮理太

郎、西堀榮三郎、角田吉夫、藤野

關夫、田邊主計、織内信彦、茨木

猪之吉、藤島敏男、吉田竹志、山

根雅男、佐藤隆太郎、島田巽、木

村鐵吉、川喜田莊太郎、佐野喜三

郎、川崎吉藏、初見一雄、三田幸

夫、村尾金二、中村徳郎、辻莊一

神谷恭、土屋鎮雄、塚本繁松、

事務所便り

◇いよいよ大戦は勃發した。今度こそ國の全力をあげての大戦争である。理念の争ひも無用、自由主義も全體主義もない只一丸となつてぶつかつて行くのみだ。

◇今度の大戦となつて一週日餘殆んど來室者が無い。無理もない事と思ふ。或時期迄は當然であらう

◇本會も一舉に戦時體制に入る事とならう。會報も來月から頁數を半減する事となつた。これもある時期迄忍ばれたいものである。

◇講演と映畫の會は千數百名の來會者を得て盛會裡に終了した。會員の集ふもの三百名に近く本會として未會有の事である。御世話下さつた方々に此處に改めて御禮申上げた。

◇御待たせした「高山深谷」も漸く本會報と前後して世に出る事となつた。戦争の終る迄はこんな堂々たる出版は最早出來ないであらう。一本を蔵せられた。

◇先號會報新入會者中鈴木端生氏(ミズキ)と讀み、住所は松阪市殿町一八一である。又江口佳之氏(ヨシユキ)と讀む。誤植をおわびして訂正したい。

(十二月十五日塚本生)

山と溪谷社刊行スキー圖書

スキーと山と溪谷 年鑑 4圖20錢 (送共)
山の雜誌

本誌は讀者大増の爲臨時入手不能につき、購讀御希望の方は年極にて御豫約願ひます。

塚本 著 日本の山々 初版賣切
岡治

目下再版準備中につき、御買渡の方は書店又は本社へ御豫約下さい。

中 村 著 東京附近雪艇の旅 1圖60錢 (送10錢)
謙 著

スキーの穿き初めから紀行と案内篇より成る初級中級のスキー—絶好の伴侶。

山と溪谷 新しきスキーの山旅 2圖 (送10錢)
社編

全日本一流のスキー家十數名執筆になる北海道から九州迄のスキー登山、ツアーの紀行と案内と記録の大集成版。

2602年版 山岳寫眞年鑑 3圖80錢 (送10錢)

「アルパイン・カレンダー」に代つて堂々登場した山岳・スキーの繪卷。四季の山岳美が24面のプレートに依つて飾られる我國初めての寫眞集。製版完了。目下印刷中。來春早々刊行。部數に限りあり必ずハカキで御豫約下さい。刊行前御通知します。

山と溪谷 スキー鍛鍊の夕 會員券
社主催 40錢

講演・馬場忠三郎氏、映畫・塚本岡治氏、12月23日午後6時、於軍人會館(會員券はプレイカイド、市内運動具店に有)

東京市芝區 山と溪谷社 振替東京
田村町6の4 60249 番

編輯後記

昭和十六年十二月八日大東亞戦争の勃發を見た。我々は直ちにでも剣を抜き銃をとつて立ちたい氣持にかられると同時に今まで行つて來た仕事が無何にもまどろっこしいものに感じられた。
それはしかし一時の興奮であつた。我々は今までやつて來た事を益々力を盡して果さればならない山岳會はやはり山を通じて。
本誌には會員の通信が非常に多

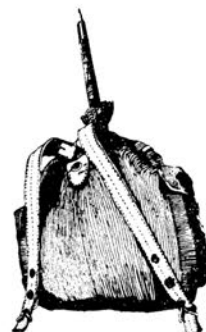
かつた。諸氏の活躍を物語つてゐて誠に喜ばしい次第であるが、慇懃にいほう。單なる便りや記録の報告から今一步前進されんことを。又圖書の紹介も多數あり、執筆者にはその勞をとられたことを御禮を申し上げます。併し特に本誌といふのではないが最近の山岳會の書評は必しも厳正でないといふ聲をしばしば聞く。書評の評、會報自體の書評もあつて然るべきではなからうか。
(吉阪記)

昭和十六年十二月二十五日 印刷納本
昭和十六年十二月二十八日 發行
頒價二〇錢
日本山岳會内
編輯者 吉阪隆正
發行者 塚本繁松
東京市芝區榮町一(不二屋ビル)
發行所 法人 日本山岳會
電話芝四三二一六四九
振替東京四八二九
東京市芝區今入町二十六番地
印刷者 鈴木和男
印刷所 株式會社 鈴木商店
オカモト社 印刷部
東京市神田區後馬場二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社

麻防水布製

キスリング型(E式)

ルツクサツク



★品質優秀責任保證★

布地見本進呈

大型 二尺 二七・六〇
中型 一尺八寸 二五・二〇
小型 一尺六寸五 二四・三六

◆デルモス各種ハイキング用品

右は物品税二割を加へた改正値段です

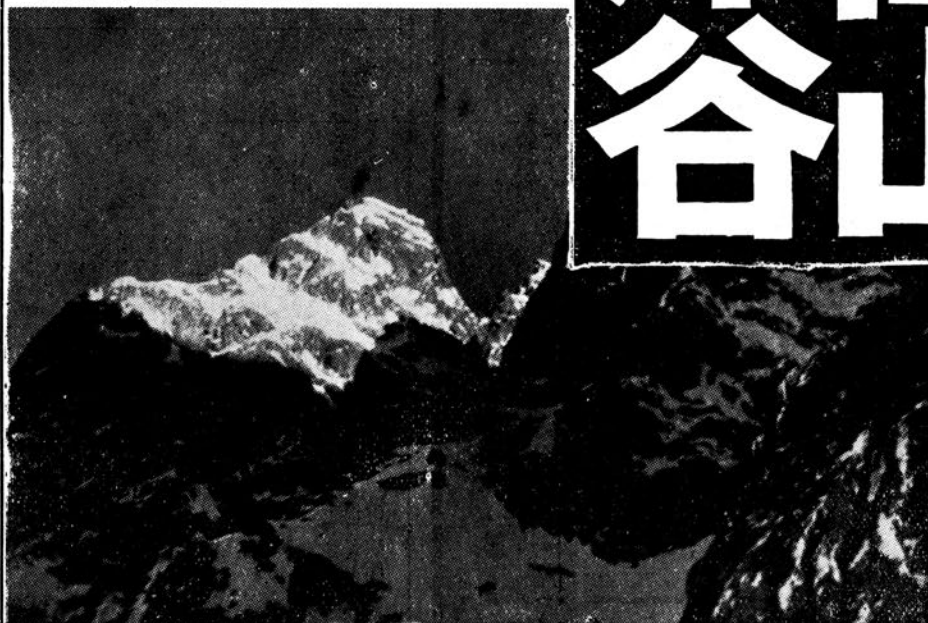
御諒承下さい

東京市神田區神保町三ノ一(専修大學電停前)

片桐テント登山具店

電話九段(3)三二一〇番
振替口座東京九一八四番

● 編會岳山本日
と眞寫の山
集筆隨と繪



高山 深谷

本邦山岳界の權威
一堂に會したる不朽の書

規格B5・アート寫眞百拾頁・函入堅牢本

定價 七円五十錢

送料三十錢

...眞寫 繪 隨筆 序

山田 亮三	宮古 芳夫	船越 好文	服部 直三	永田 一修	塚本 繁松	清水 武甲	小林 誠一郎	風見 武秀	奥野 正亥	今井 雄二	網本 芳人	青井 竹三郎	茨木 猪之吉	足立 源一郎	田部 重治	尾崎 喜八	高野 鷹藏	
大和 雪嶺	村井 三郎	松崎 信雄	馬場 忠三郎	沼井 鐵太郎	月原 俊二	ジョン・モリス	齋藤 金一郎	冠 松次郎	小倉 志郎	岩田 義三郎	猪谷 六合雄	青木 昇	中村 清太郎	石井 鶴三	塚本 繁松	冠 松次郎	木暮 理太郎	
立教大學山岳部	村林 忠	丸茂 慎一	早川 義郎	野口 未延	當本 正義	鈴木 正俊	佐々 彌一	吉寺 彌一	大塚 武	小谷 部全助	久保田 茂	柴田 登茂次	小合 正勝	織内 信彦	岡田 紅陽	井上 昌三	跡部 昌三	
	持田 勇吉	三浦 敬三	橋本 三八	橋本 三八	外山 義夫	武田 久吉	塚本 閑治	島山 梯成	藤島 誠二	三ヶ尻 直	山田 應水							

あなたがち寫眞技術の最も優秀なるもののみならず、構圖や調子の傑れたるもののみならず、地域的配分にも考慮しつつ、特殊な手法と天候の變化を活用して、主點には、われらが高山や深谷で感ずる山の靈氣、山の靈感或は實感を最もよく表現したる寫眞集即ち、權威六十餘家の手に成る百餘點の名作集とその解説的隨筆、それに諸大家の山岳隨筆數篇、山岳畫家數氏の筆になる香氣高き山の素描數點より成る絶對的名著である。登山家寫眞家に絶好の趣味參考書たるは勿論、何人の坐右にも敢てお奨めしたい。

スルア

八八八四二京東替振

東 神
京 保
神 町
田 三